



【絵画】

## 「積み重なる『存在』へのまなざし」

画家 永山 優子 氏

第六回目の「**Fieldworker**」は、画家の永山優子先生です。永山先生は、写実画家として自身の制作を行うだけではなく、伊達市噴火湾文化研究所でアートディレクターとして活躍されています。絵画教室や制作、そして展覧会について話を伺いました。

—— だて噴火湾アートビレッジが6年目を迎えました。

これまでの印象をお話しいただけますか？

私は絵画教室講師として活動に関わってきました。一般的な絵画教室というのは作品を次々と作って、それがたまると展覧会をする、ある意味モノを作る場所という性格が強いわけです。その個々の制作の中で必要な技術や方法を先生から教わるという体質ですよね。

しかし、アートビレッジの絵画教室は絵を形作ることよりも、「なぜ絵を描くのか」を考えるのがメイン。考えることで制作を深めていくことがこの理念だと聞いていたので、時間割から内容まで、何もかも発想が違っていました。

以前、学校や絵画教室で教えた経験もありましたが、そのままでは役に立たず、最初の頃はかなり試行錯誤しました。

この頃は「野田・永山塾」と謳うとおり、本当に絵画教室ではなくて「塾」になってきたなと感じます。要するに、人材を養成するわけですね。



永山優子（ながやま ゆうこ）

画家。1975年8月生まれ。

広島市立大学大学院博士課程修了。  
だて噴火湾アートビレッジ・アートディレクター。

—— 理想の絵画教室、絵画教育みたいなものは見えてきましたか？

私自身、新たに絵を描き始めるたび初心に帰る感覚があるので、長く続けている受講生との関わり方が教える人と教わる人という感じではなくて、意見交換する関係になってきてている。いよいよみんなで本当の芸術とはなんなのか、そういう事を語らう理想に近づいてきたと思います。

—— 生徒さんは変わってきましたか

子供にしても大人にしても、入ってすぐの時は、我々がこんな塾にしたいと意気込んでいることはまったく自覚していないわけですよね。まあ、手先の器用さで上手く描く人はいますが、制作とはどういうことか、自分自身の何を形にするのか、そんなに深く考へてい



なかったと思うんですよ。

でも、5年やっていると、みんなとても進歩しますね。絵が上手になるというのは、要するに自分のやるべきことは何かに

気がつくこと。それが技術的な向上に繋がっていくと思うんです。それを実現できるまで根気強く取り組める人が受講を続けていますね。

途中でいろんな事情があつて塾を去らざるを得なかつた人達というのは、こういう言い方は失礼ですけれど、絵が一大事ではなく、いわゆる「趣味」なんですね。

「絵を描いてないと生きていけない」くらいのめり込んでいる人が続いていると思います。

描くことだけではないですね。特に大人の教室では野田弘志先生が自らの経験をふまえた哲学をお話して下さるので、知的教養を深めることを求めて集まる人もいます。芸術を通じて、生きていく上で有意義な時間を過ごせる。そういう場所を作るのがすごく大事だと思います。

その意味では、絵画教室だけではなく、ピアノマスタークラスも同じですよね。なかなか取っつきにくいかもしれないけれど、だからこそ、水準の高い世界に触れられるチャンスをどこかで作っていかなければ、知らずに一生を終わるかもしれません。どこにも無いようなチャンスは、特に子供のためににはできるだけあった方がいいと思っています。

### —— ご自身の制作について、この5年間はいかがでしたか？

私自身の制作のテーマは、まずモチーフとして人間を描くのは変わらないんです。でも、人間の何を描くのかというところが、伊達に来てから大分変わったというか、考えが構築されてきたと思います。

以前はモデルになってくれた人間を見て、「この人が生きていることを描く」という意識で制作していました。でも、伊達に来てからは、モデルを描くことは変わらないんですが、自分自身も生まれて、生きて、老い、それで毎日考え方�이っていく、つまり自身の日々変化する思考とか視線というものを画面に蓄積していくという考え方へ変わってきました。

写実画というのはよく「客観描写」と言われます。誰が見ても本物だと思えるようそっくりに描くところが写真やコピーみたいだと言われますけど、私はやればやるほど「主観」の世界だと思います。ある人間が

モチーフやモデルをどう見るかという、一つの視線でしかない。だけど、その完璧を一瞬にして捉えるのではなくて、変化する思考の下に繰り返される発見をずっと蓄積していくのがすごく大事だと思っています。

先日、ヨーロッパへ行った時も思いましたけど、生まれて、生きて、段々朽ちていって、死んでいくことを、物なり人なりを見てどう考えるのかを絵にしないと駄目だと感じました。知識のみに裏付けられた観念的な作品と、実際に見て感じることが乗った作品とでは質が全く違うことに、この頃ようやく気づきました。

それで、こういう作品（5頁右写真）に取り組んでいます。今回は写真を基に描いているので、始めた当初は写真を絵に描く意味はあるのかという疑問がありました。また題材が持つ芸術的可能性は果てしなく大きいのに、自分はその表面的な特徴しか見ていないのでは、とも悩みました。しかし2年前に取りかかった頃よりも、何を描くのかといった制作に対する考え方が明確になってきて、再び描こうと思うようになりました。この間に一人の画家として制作を続けていく姿勢が固まってきたように感じます。

### —— 著書や新聞連載で絵画論を書かれていますが、制作活動において、それは重要なのですね

先日、詩人の高橋睦郎先生の講演で、先生が「人は言葉でものを考える」と仰っていました。確かに絵を描きながら「これではいけない気がする」と感じることはできますが、何がどういけないのかを言葉という形にした方が問題をより深く自覚できます。

ただ、自身の書いたものを読み返してみると内省的な事ばかり書いていますので、もっと写実することや絵画という表現のすばらしさについて、前向きに書いてもいいかなと思っています。

いずれにしても文字に表すことで目指すところが見て、整理が付きますから、文章を書くことは大事だと思います。苦手なので、苦しいんですけど・・・。

### —— 野田先生もその辺を重要視していますよね

そうですね。絵を描く人に限らず、人は自分の中の何かを明らかにするために表現するわけですよね。けれど表現したときに、自分だけが形にできたと満足して完結するんじゃなくて、それを誰かが見て共感したり影響されることを目指していると思うんです。ですから表現する時には、自分の中の何かを徹底的に自覚する必要がありますよね。よくわからないままどんな形にしたところで、見る人にもそれが何なのかわからないと思います。その意味でも文章を書くのは大事になりますね。

## —— 現在、取り組まれている作品について教えてください

今は、「発掘現場」と「子供」です。いずれも人間が生きて、死ぬという極々当たり前の流れの一場面です。だけど、それを直接目の当たりにして実感するという機会は、人生の中で段々少なくなっている。そのことをこの発掘現場で感じます。子供は小さくても、存在の重みとして大人に劣るわけじゃない。当たり前のことだけど、本当に何にも代えられないじゃないですか。

## —— 一見別なものを描いているような印象ですが、そうではなく対になっているのですね

同じテーマですね。この人（発掘現場）もよくぞこんなに立派な人間の形で出てきたなと感動しました。誰もが行き着く姿ですけど、それを実感させられたらし、だから今この時間を生きようと思わされました。

骨について、最初は恐れを抱きますけど、みんなの中にこのような形があると思うと、畏敬を覚えます。それから形が好ましい状態で絵になるとも考えます。だけど、そういう美しさと自分の表現したい「美」とはまた次元が違うと思いたい。存在そのもののかけがえのないことが美しいと思いたいんです。

人間を題材に制作することが多いので、ついモデルの生きている時間と思うんですけど、何を描いても同じなんですよね。つまり私自身が生きていつかは死んでいくので、例え無生物を描いていても、そこに今の自分の時間が関わってくるという意味では、やっぱり生きることを描いていると考えるようになりました。今は逆に「生きる」ということを描かないと、意味がないと思うんです。

最近はパソコンなどによる画像処理技術を活かして、制作の能率が上がっているといいます。それに伴って技術的に目を見張る作品を作る人が大勢いますが、作品に生きることの実体が表れているのかどうかは疑問に思います。そうしてみると、美術館に大事に保存されている過去の名作たちには、やはり、生きている



制作中の「Man is \_\_\_\_. USU4GP020」(左) と「Man is \_\_\_\_. YŪ」(右)

ことが表現されていると思えるんですよね。今の自分に危機感を感じますよね。技術は向上するけれど、自分が生きて、死ぬことと無関係に作品を作っている気がして・・・。特に写実をやる画家はそこを表現しなくて何を描くのかと思うんですよ。

## —— 第2回目の伊達市噴火湾文化研究所同人展が2012年5月からスタートしますが、意気込みをお話していただけますか

今、話してきたようなテーマへの取り組み方とか、絵画を描くとはどういうことなのかを、このアトリエで悶々と考えたり描いたりして毎日過ごすわけですけど、自分で「考えた」、「描いた」、で終わってしまったら趣味と変わらないと思うんですね。それが人の目に触れて、作者も見る人も何か通じ合い、何かが変わるのがすごく大事だと思うんですよ。

ただし、主義の無いただ並べるだけの発表をすればいいとは思ないので、現在はこの同人展以外は発表していません。ですから、同人展はとても大事な機会なんです。これに向けての制作は、「美とは何なのか」について、考えを言葉にしなければいけないですし、そして何より作品でわかってもらわなければいけません。

「あなたにとって美はそうだったの、ふ～ん」と他人事で終わるのではなくて、つまり、知識として理解されるのではなくて、ある場面から感じた「存在」が、どんなにかけがえのないものかということ、それは常に変化して、いずれなくなるということ、それが「存在」なのだと作品が語らなければ駄目なのです。

## —— もう少し制作活動が続くと思いますけれど、お体に気をつけて下さい

インタヴュアー：大島直行

■第2回伊達市噴火湾文化研究所同人展は、7月1日～8日（札幌：北海道庁旧本庁舎・赤レンガ庁舎）、11日～18日（伊達：だて歴史の杜カルチャーセンター）で開催されます。

